

秀賞

第二の言語と私のチャレンジ

新潟県立直江津中等教育学校

2年 小川 和葉

皆さんは、「自分の第一の言語」と聞いて、何を思い浮かべますか。日本人ならば、大抵の人は「日本語」と答えると思います。では、「第二の言語」と言われて、何が思いつきますか。英語、中国語、さまざまな言語があると思います。その中で、私の第二の言語は「手話」です。私がこの言語と出会ったのは、ある言葉がきっかけでした。

「私も入る！」

これは小学2年生の時、母が仕事の関係で手話講座に入ることになり、「一緒に入る？」と聞かれました。当時の私は、まだ障害についてあまり興味関心を持っていませんでしたが、最近帰りが遅い母ともっと一緒にいたいと思い、講座に入ることを決めました。

そもそも手話とは、耳や口が不自由な人のための、上半身で表現する言語のことです。

手だけ使うイメージがあるかもしれませんが、首をかしげたり、体を突いたり、たたいたりする表現もあります。特に大切なのは「表現」です。例えば、「楽しい」という手話を真顔でしても、相手に楽しさは伝わりません。対して、笑顔ですると相手に楽しさを伝えることができます。表現をつけることで、相手により伝わりやすくなるのです。

初めて講座に参加した日、周りは大人だらけでした。緊張していると、前に男の人が来て手を動かしました。それと同時に女の人が

「みなさん、こんばんは。」

と言いました。その時初めてこれが「手話」なんだと分かった瞬間でした。

講座では、テキストを使いながら講師の方や受講生と手話で単語や会話などを学びます。講座には2年間通い、現在は手話サークルに参加し、より日常的な会話の練習をしています。

手話を習い始めて、私の生活に変化がありました。それは、母とのコミュニケーションの方法です。私も母も耳が聞こえるので、普段は声で会話をしますが、手話を使う場面も多くあります。例えば、手話は手元さえ見えればいいため、発表会ではステージの上から母と会話ができました。他にも、ジェスチャーのように手話を混ぜて話したり、言葉が出てこない時にとっさに使ったりもします。これが意外と便利で、今では手話は私の生活に欠かせない言語となり

ました。

講座に通っていた頃、手話通訳の方に勧められ、母と一緒に手話検定を受けました。手話検定とは、手話に関する知識やコミュニケーション能力を評価する試験です。筆記と面接試験があり、私は小学4年生の時、5級と4級を受けて合格しました。翌年には3級を受けましたが、結果は不合格でした。原因は、勉強不足です。面接試験では、テーマに沿って1分間のスピーチを手話で行い、その後試験官との2分間の質疑応答を行います。

私は「習い事」について話しましたが、知識不足と内容の浅さから、うまく相手に伝えることができませんでした。とても悔しかったです。

この悔しさをバネに、翌年に再挑戦しました。前日まで単語や、さまざまな内容に対応できるスピーチを考えました。努力のかいがあり、無事3級に合格することができました。とてもうれしかったです。この経験を生かし、次は手話検定2級に挑戦したいです。2級は3級より内容が増え、手話表現だけでなく、手話や聴覚障害に関する知識も求められます。今の私にはまだ難しいけれど、大学生までに合格を目指して、これからも手話を学び続けたいです。

そして私はもう一つ、挑戦したいことがあります。それは、障害者への理解や関心を広めていくことです。近年、障害者への理解や支援は進んでいますが、いまだ差別や偏見が残っています。障害について正しく理解することで、偏見や誤解を減らし、正しい配慮ができるようになります。手助けをすることも配慮の一つですが、普通に接することも大切な配慮です。一人一人の意識が、少しずつ社会を変えていく力になると私は信じています。

また、手話の魅力を多くの人に知ってもらう活動にも挑戦したいです。手話というと特別なもののように思われがちですが、実は誰でも学べる身近な言語です。声を出せない場所でも会話ができたり、言葉にしにくい思いを伝えたりする手段にもなります。そんな手話の魅力を、学校や地域を通じて伝えられるような活動をしていきたいです。

手話と出会ってから、私の世界は大きく広がりました。最初は、母と一緒にいたいという気持ちで始めたことでしたが、今では手話は私自身の第二の言語であり、生活の一部となっています。これからも手話を通じて多くの人とつながりながら、自分にできることを見つけ、挑戦を続けていきたいです。